広島県立文書館「収蔵文書の紹介」展

収蔵資料にみる 昔の旅の和歌・唱歌

古典の日

平成26年10月31日(金)
～平成27年1月10日(土)

瀬戸内海は、古代以来、遣唐使や様々な官吏・使節が通行し、その風景は八世紀末編纂の『万葉集』をはじめ、多くの和歌に詠まれてきました。

江戸時代（近世）以前の和歌は、実際の風景そのものよりも、その風景や場所にまつわる特別な〝意味〟や家族への〝思い〟、望郷の念を歌ったものが主流でしたが、江戸時代になると庶民の旅が流行し、実際の風景をより視覚的に観察して詠む和歌が数多く作られるようになっていきました。

明治期に入ると、学校教育の場を通して様々な「唱歌」が作られ、広められていきました。この時代を代表する旅の唱歌と言えるのが鉄道唱歌ですが、他にも各地の名勝・名産を歌う唱歌が作られました。

この展示では、それら旅の歌に関する資料を、近世の和歌と近代の唱歌に分け、それぞれについて、当館収蔵資料の中から選び、紹介していきます。

近世の旅の和歌

江戸後期（特に十八世紀以降）になると、商品経済の発達に伴って、街道や宿場が整備され、社寺参詣や名所遊覧など、庶民の旅が盛んになりました。同時に、様々な道中記や紀行文が生まれるようになり、自然の風景や旅の情景を素直に捉えた和歌が数多く記されるようになっていきました。

当館の収蔵文書の中には、江戸時代の庶民が記した旅日記が数多く残っていますが、それらの中には、旅の和歌を記したものが少なくありません。

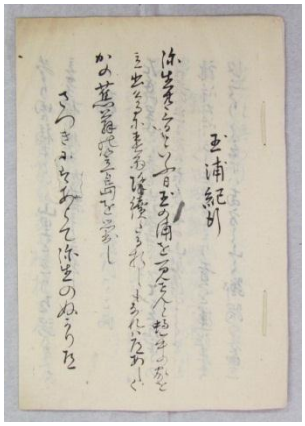
この時代の旅は、専ら船か徒歩によるものであり、とくに瀬戸内海地域の旅では、船が主たる交通手段でした。そのため、和歌に詠まれる内容も、海や湊の風景、船の様子や船から見える様々な自然の風景や情景を詠んだものがたくさん残っています。

ここでは、広島城下京橋町の有力商家であった保田家（屋号「縄屋」）の旅日記を中心に、昔の旅の和歌を紹介します。

「玉浦紀行」（竹内家文書一九八八〇一・六四三八・六八九七）

賀茂郡吉川村の割庄屋竹内家文書の中にある尾道（「玉浦」は尾道の古名）への旅日記。各地で詠んだ和歌が随所に記されている。

三月二十三日に吉川村を出発し、三津浦（東広島市安芸津町三津）で一泊している。二十四日に三津浦を出発し、船で吉名・竹原・高崎の沖を航行し、その日の暮れに尾道に到着。帰りは二十七日に出発し、糸崎に船を寄せて糸崎神社を参拝し、能地・高崎を経て夜半過ぎに三津浦に帰着している。



《和歌》

1　三津浦を出船して。

漕出て　はれ間も三津の　浦船や
いつかはてなき　春雨の空

2　尾道湊で大雨の中、滞船して。

雨の夜に　淋しくやとる　枕にも
もらさでつぐる　暁の鐘

3　糸崎にて神社に参拝して。

千年経る　みとりの松ハ　枝たれて
朝日かゝやく　糸崎の浦

4　能地（三原市幸崎町）沖の様子。

桜鯛　浮とふ名にし　聞つるに
うかすや覆む　能地の海原

5　高崎（竹原市高崎町）沖の様子。

高崎の　浦漕船の　いさり火ハ
波間に影の　うつりてぞ見ゆ

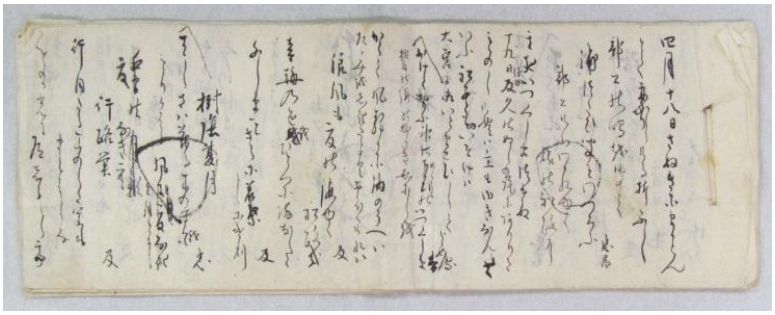
6　三津浦に着船して。

うは玉の　夜の海原　漕わけて
三津のうらわに　着にける哉

「（讃岐）道中日記」（保田家文書一九九八〇八・二三）

広島城下京橋町にあった商家保田家（屋号・縄屋）の旅日記のひとつ。同家六代当主九左衛門（忠昌・福抱）が知人と共に和歌を詠みながら讃岐へ船旅した時の日記で、十八世紀終わりから十九世紀初め頃のもの。

四月十八日に出船した九左衛門は、その夜、厳島の徳田及久という人物のもとを訪れ、翌日二人で出発。その日の夕方雨が降り出し、音戸の瀬戸で船を泊めて一泊している。二十日には横島（呉市安浦町）に上陸し、二十一日には糸崎に着船。その後、尾道・向島を過ぎて阿伏兎（福山市沼隈町）に着き、観音堂を参ったあと、鞆の町へ行き、保命酒店や「祇園之社」（沼名前神社）などを訪れている。二十二日の朝、鞆を出発した二人は、午前中に下津井に到着。そこから讃岐国高松へ向けて出帆し、約二時間かけて高松に到着した。



《和歌》

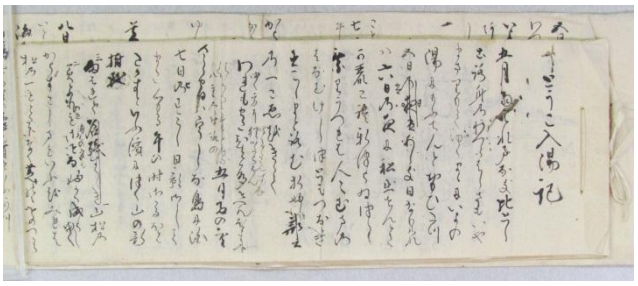
1　横島（呉市安浦町）に上陸して。

2　名もしらぬ　小しまか磯に　おりたちて
　　手すさむ程の　かひも有けり
　　誰かまた　こゝにうつして　津の国や
　　須磨のうらはの　松の面影

糸崎に着船。松原を須磨の名所に例えて。

「道後入湯記」

（保田家文書一九九八〇八-三〇）



伊予国道後温泉を訪れた保田家六代当主九左衛門（忠昌・福抱）の旅日記。

五月七日に宇品を出帆した船は、烏小島を経て、夕暮れ時に音戸の瀬戸へ着き一泊。八日に出帆した船は、倉橋島の東の突端、「亀が首」を経て南下し、その日の夕方に高浜（愛媛県松山市）で一泊。翌日三津浜（愛媛県松山市）に着船して、昼頃道後温泉に到着している。

《和歌》

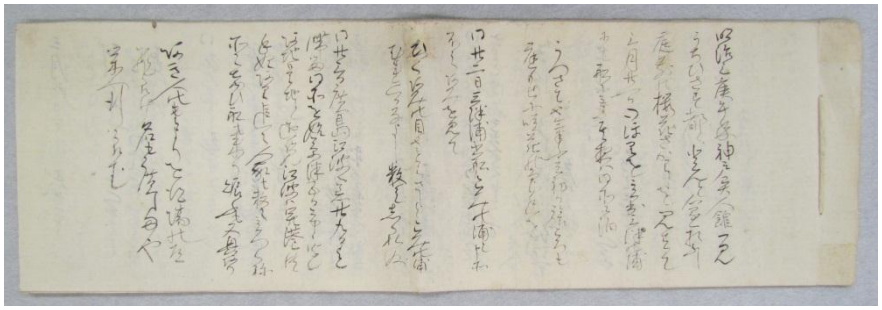
1　烏小島
　　する墨乃　色もとみれハ　さもなくて
　　からす小しま乃　山乃芝草

2　亀が首
　　けふこそは　朝なきに　のとけく越て　よろつ世の
　　齢をちきる　亀か首嶋

3　興居島
　　いつかたを　わか住まとゝ　かもめ鳥
　　磯こす波に　立さわくなハ

「〔登坂旅行記〕」　明治三年（一八七〇）

（竹内家文書一九九八〇八六八九〇）



賀茂郡吉川村の竹内亮左衛門が残した旅日記。亮左衛門は文化十二年（一八一五）に吉川村庄屋を務め、その後賀茂郡の割庄屋を務めた。また、四日市町年寄や幕府巡見使・奉幣使通行の御用掛なども務め、慶応二年（一八六六）に永代苗字帯刀を認められた。明治十一年（一八七八）没。

亮左衛門は、地元の俳人らと共に西条連として多くの句や紀行文を残した人物でもある。この旅行記は、明治三年（一八七〇）に神戸異人館や京都・大阪見物のため旅した際の日記。賀茂郡三津浦から船に乗り、瀬戸内の各所を詠んだ和歌を数多く記している。とくに、目的地の神戸・大阪・京都では、滞在中に詠んだ多数の和歌を列記している。

《和歌》

1　広島江波港
　　あき人の　たよりを得場の　道ひらけ
　　名も広しまや　栄へ行らむ

2　宇品港。大雨の船中にて。
　　波まくら　しきりにすさふ　雨の音に
　　夜半の夢さへ　むすひかねつゝ

3　三津浦。長雨の様子。
　　降つゝく　長雨もいとく　ものうけれ
　　いつかはれまも　三津の浦わふ

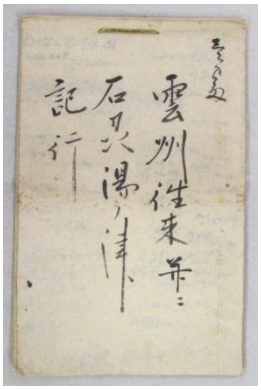
4　尾道。千光寺を登って。
　　玉ありし　そのいにしへの　跡訪へば
　　ゑほし岩にて　名のミ残りて

5　室津（兵庫県たつの市）。
　　とことはに　千船百ふね　よりくるや
　　むかしの玉の　ひかりしたふて

6　神戸にて異人館街の様子を見たところ。
　　風つよく　沖つしら波　あれしかと
　　室のみなとハ　音たにもなし

7　大阪道頓堀入口、土佐堀付近の様子。
　　こと国を　わか目の前へ　引寄せて
　　ひさけるさまを　見るそ楽しき
　　こと国は　はるけき事と　思ひしに
　　隣のことく　船や行かふ
　　なにハ江の　あしまをわけて　そこはかと
　　船のうき寝も　楽しかりけり

「壱番　雲州往来并二石州湯ノ津記行」
「弐番　〔道中日記〕」　（保田家文書一九九八〇八-三四・二八）



保田家六代当主九左衛門（忠昌・福抱）が雲石両国を訪れた際の旅日記。

三月二十三日に広島を出発し、三田川沿いに福田村（東区）、三田村（安佐北区白木町）と北上、甲立（安芸高田市甲田町）、三次十日市（三次市）、布野（三次市布野町）と過ぎて、二十七日に赤名峠に到着。掛合（雲南市掛合町）、三刀屋（雲南市三刀屋町）を経て二十九日に今市（出雲市今市町）に到着した。

旅行記は二分冊となっており、一冊目は四月一日に日御碕や宇龍の湊を見物したところで終わり、二冊目は一畑薬師から伯耆大山をのぞみつつ、直江（出雲市斐川町）を経て帰路につく行程が記されている。二冊とも、随所に和歌が盛り込まれており、また大山や三瓶山など、途中の風景を描いた絵も挿入されている。

《和歌》

1　三田村（安佐北区白木町）にて三田川の景観を見て。

三田川の　音もうすめる　夕くれに
つな手くるしく　のぼる船人

2　一畑寺（島根県出雲市）より大山を見て。

いく千世も　まつえの水の　海こしに
むかふはふきの　名にたてる山

3　園村（島根県出雲市）より宍道湖に映る大山を見て。

水うミに　影うつすや　大山の
帆かけて　はしる　波もをだやか

4　比和（庄原市比和町）で滞留して。

雨のひ　は　とまりたまへと　しのひねの
やまほとゝきす　まつ今宵かな

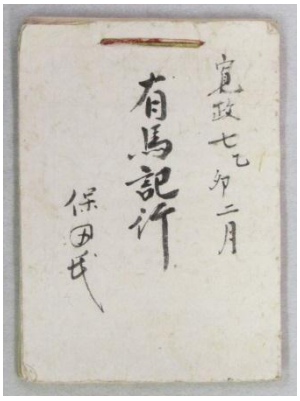
5　田房（庄原市総領町）にて、泊まる宿を変更して。

やすもうと　おもふ田房の　まちかひて
綿やへきたる　今のよろこひ

6　下瀬野（広島市安芸区）にて。

瀬野川の　いくせしら波　さかのぼり
ひれふる鮎も　見へて涼しき

「有馬記行」　寛政七年（一七九五）　（保田家文書一九九八〇八-二四）



保田家文書の中の旅日記の一つ。寛政七年は五代当主九左衛門（義忠）存命の頃であり、字体から義忠のものと思われるが作者は不詳。表題は「有馬記行」とあるが、中身は伊勢参りの行程を記している。

二月十六日に宇品を出発、二十一日に海路大坂に至り、さらに奈良・法隆寺を訪れている。二十九日に宇治・平等院を訪れた後、京に入り、約一ヶ月滞在している。三月二十四日には近江の草津へ、さらに二十八日には伊勢の二見が浦を訪れ、「はるかに富士山を見ゆる」と記している。

《和歌》

1　柏島（呉市川尻町柏）にて、山の蕨を取って。

磯山の　岩かけわらひ　をりをえて
かゝる舟路の　慰とする

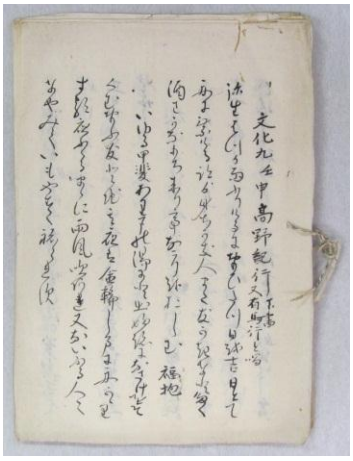
2　百島（尾道市百島町）を出船して。

漕いてゝ　舟路のとかに　出る日の
影　もまハゆき　にほひくる　浪の遠かた

3　赤穂（兵庫県赤穂市）の塩田風景を見て。

わけて猶　霞むそふかき　はりまかた
なたの塩屋のはるの夕暮

「文化九壬申高野記行又有馬行と唱　下書」
文化九年（一八一二）　（保田家文書一九九八〇八-八八）



保田家六代当主九左衛門（忠昌・福抱）の旅日記の一つで、亡き母の遺髪を高野山に納める旅の記録である。

三月二十二日に出発し、瀬戸内海を東へ航行し、途中讃岐で金毘羅参りをしたあと四月初旬に大坂に到着。住吉の松原を見物したあと南下し、紀見峠を経て橋本（和歌山県橋本市）に至り、十一日に高野山に登っている。十六日には京へ上り、暫く滞在。五月に入り、伏見を経て帰路についている。

《和歌》

1　馬島（呉市安浦町）を見て。

つなかねは　さそな心も　はるこまの
たはむれあさる　磯のわか草

2　忠海沖で夜泊して。

有明の　月をともねの　なミ枕
おほろにむすふ　ふるさとの夢

3　能地（三原市幸崎町）～尾道付近でタコ漁を見て。

をひたゝし　玉のうらへに　春なから
たこ釣あまは　木の葉うかへて

4　牛窓（岡山県瀬戸内市牛窓町）にて。

漕ゆかむ　そなたの方も　しら浪の
たちわつらへる　牛まとのさと

5　尼崎から大坂への航路にて。

なかめある　難波の岸の　はかくれに
たなゝしをふね　こゝら行かふ

「「時雨の山めぐり記」」　**（保田家文書一九九八〇八-一五〇）**

保田家六代当主九左衛門（忠昌・福抱）が書き記した広島近隣の旅行記。

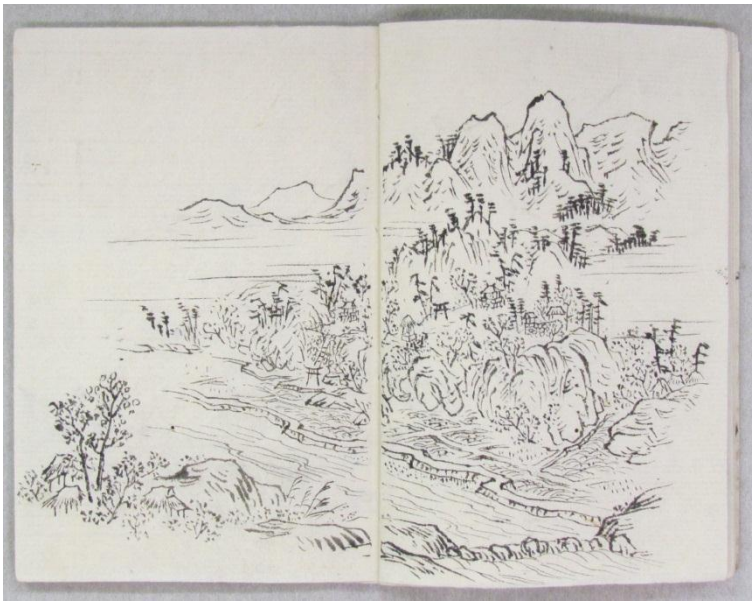
葉月（陰暦八月）十日、牛田の日通寺（広島市東区牛田新町）から渡船で出発するところより記述が始まる。太田川を渡り、祇園から安川沿いに大町、安村、高取、長楽寺、伴（現在のアストラムライン沿線）と回り、大塚から己斐村へと南下し、城下へ戻っている。

長楽寺付近の絵と、道で出会った柴を背負う老人の絵が挿入されているが、六代九左衛門は、和歌と共にこうした挿絵を旅日記の中によく描いている。

《和歌》

1　長楽寺にて観音堂（左の挿絵）を訪れて。

おくて田の　ほなミ色つく　をかこへに
ひるまも虫の　声しきるなり

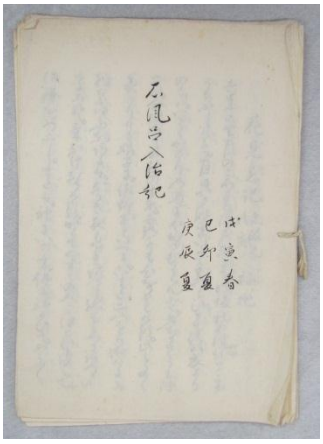


2　大塚から己斐に向かう道すがら、時雨に遭って。

秋とゝもに　なかは過ゆく　山めくり
ぬれて嬉しき　はつしくれ哉

「石風呂入治記」　**文政元～三年（一八一八～二一）**
（保田家文書一九九八〇八-八六）

保田家六代当主九左衛門（忠昌・福抱）が記した宮島への旅行記。文政元～三年の各年の宮島旅行を書き



記している。最初の文政元年の記述では、九左衛門の妻が病から快復したのを機に宮島の花見に出かけた旨記している。表題にある「石風呂」は蒸し風呂の一種で、江戸後期には石風呂目当てに宮島を訪れる人も多かったとされている。

《和歌》いずれも文政元年三月の記述。

1　厳島神社高舞台の舞楽を鑑賞して。

天くたる　袖もかすむと　みつ潮に
うかふ台の　月のミやひと

2　舞楽終了後の舞台を見て。

ひさをたて　肩をならへて　見し人の
俤　さへも　のこらさりけり

3　弥山に登り、山中の桜を見て。

深山木の　青葉にましる　遅さくら
咲ころわけし　かひも有けり

4　陸奥国外ヶ浜（青森県東津軽郡外ヶ浜町）から三人が宮島に来て宿泊しているのを知り、訪れて彼の地の様子を聞きながら明け方まで話し込んだ。その感慨を詠んで。

心あてに　おもふもとをき　みちのくの
外の浜風　きくもめつらし
いのるそよ　駒のあしなミ　船のミち
朝なゆふなに　さハりあらしと

近代の旅の唱歌

明治期になると、明治五年（一八七二）に制定された学制のもと、小学校に唱歌科が置かれ、教育の場を通して様々な「唱歌」が作られました。

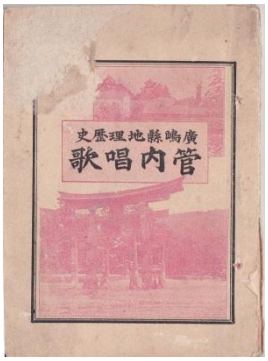
明治三十三年（一九〇〇）に書籍として販売された鉄道唱歌は、この時代を代表する旅の唱歌として大流行しましたが、『地理教育　鉄道唱歌』と銘打たれていたように、もともとは子供の地理学習のために作られた唱歌でした。七五調の膨大な歌詞の中に、沿線の地理・歴史、名勝・名産などの紹介を盛り込んだこの歌は、大人の間でも人気となり、発売直後から多数の模倣作品も作られました。広島県でも、鉄道唱歌が発表された直後に、地理教育のための広島県唱歌が地元の教諭らによって作られ、販売されました。

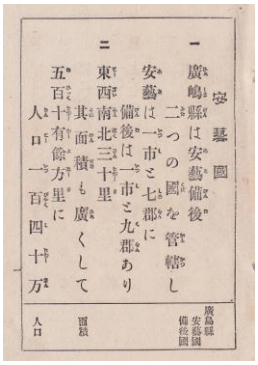
歌の内容も近世の和歌とは異なり、港や船も詞には登場しますが、むしろ各地の名所・旧跡や歴史・民話・伝説などの類が多く描かれました。また、日清戦争勝利の機運に乗って、軍歌的な要素も盛り込まれています。

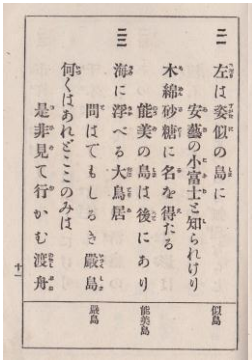
『広島県地理歴史管内唱歌』・『同』下巻

（植田静人氏収集文書一九八九一〇-一九六二）

明治三十三年十二月十三日発行
作曲：山本　生（広島県師範学校音楽教官）
著作：長屋基彦（広島県師範学校教諭）
五弓安二郎（広島陸軍地方幼年学校教官）
発行：三木半左衛門　　印刷：梶原謙吉







『鉄道唱歌』が発刊された直後から、全国各地で様々な唱歌が製作された。広島県でも、地元の学校教諭らによって、このような唱歌集が作られている。

作詞者の長屋基彦（一八六三～一九三三）は、広島県生まれ。学校教諭から神宮皇学館教授を経て、後に神戸市の湊川神社宮司となった人物。

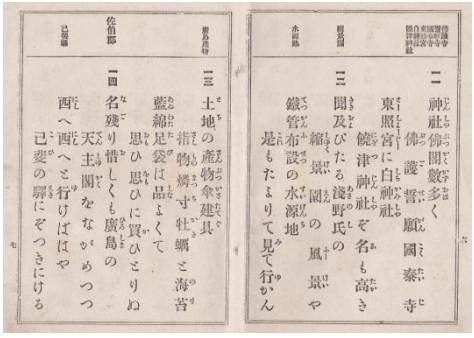
五弓安二郎は、幕末に福山藩の藩校誠之館教授を勤めた史学者五弓雪窓（せっそう）の甥。

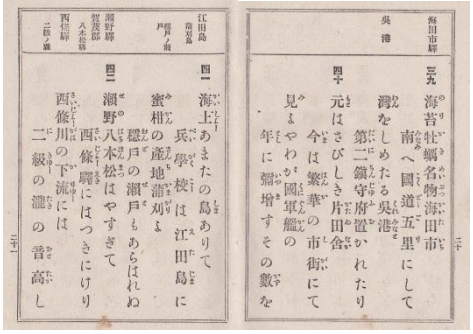
また、発行者の三木半左衛門は、阿波国出身の呉服商で、後に尾道に移住し、千光寺公園の造成と尾道市への寄付を行ったことで知られる。半左衛門はこの当時、尾道で書籍商「三木文明堂」も営んでいた。

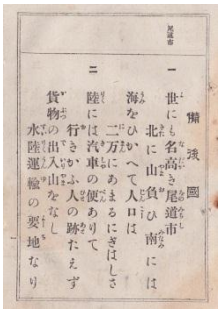
『地理教育　広島県唱歌』第壱集・『同』第弐集

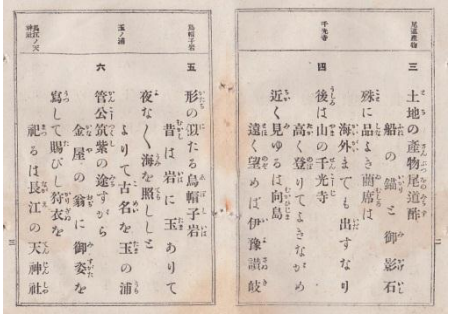
（植田静人氏収集文書一九八九一〇-一九六二）

明治三十三年十二月二十八日発行（第壱集）
明治三十四年二月三日発行（第弐集）
作歌：森田保之　　作曲：楠美恩三郎
著作兼発行：鈴木常松
印刷：梶原謙吉　　販売所：積善館支店





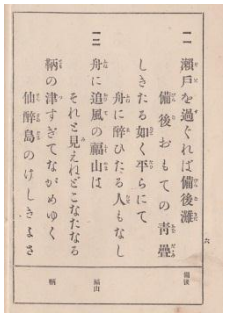
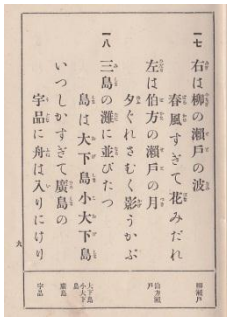
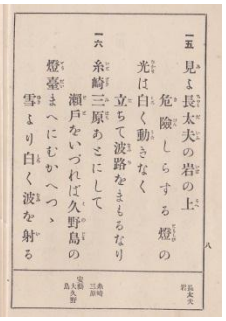




『海事教育　航海唱歌　下巻』

（植田静人氏収集文書一九八九一〇-一九六二）

明治三十三年十二月二十七日発行
作歌：大和田建樹
作曲：小山作之助、納所弁次郎
発行：三木佐助、西野虎吉　印刷：野村宗十郎
発行：開成館

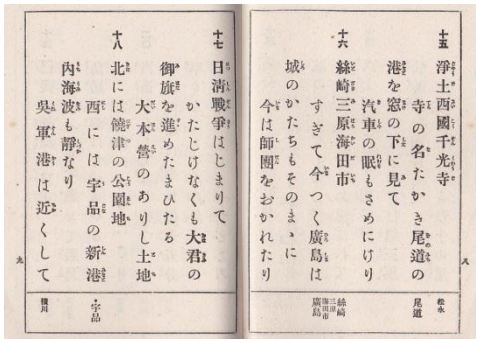
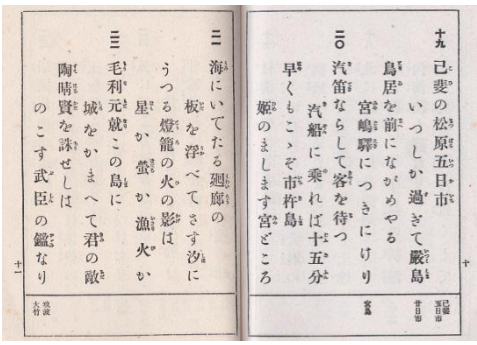
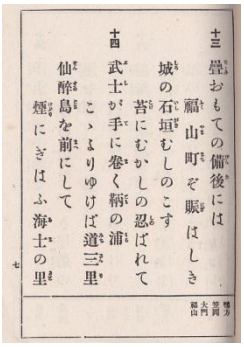
『地理教育　鉄道唱歌　第弐集』

（長船友則氏収集資料二〇〇四〇七-二三一八）

明治三十三年九月五日発行
作歌：大和田建樹
作曲：多梅稚（大阪師範学校教諭）
　　上眞行（東京音楽学校講師）
発行：三木佐助　　印刷：野村宗十郎

鉄道唱歌は、大阪の出版社「市田昇文館」の市田元蔵が企画し出版した歌集。第一集：東海道編、第二集：山陽・九州編、第三集：奥州・磐城編、第四集：北陸編、第五集：関西・参宮・南海編、第六集：北海道編という、全六集三七四番からなる長編の唱歌である。ただし、市田が出版したのは第一集のみであり、昇文館はその後経営不振に陥り、版権を買った大阪の三木佐助（「三木楽器店」経営）によって、第一集（再版）～第六集が発刊された。

三木は、楽隊と歌手を列車に乗せて走らせるなど奇抜な方法で宣伝し、これによって鉄道唱歌は大流行することとなった。

鉄道唱歌を生んだ関係者

作詞者：大和田建樹（おおわだたけき）（一八五七～一九一〇）
東京高等師範学校（現・筑波大学）教授。当時の著名な作詞家であり、数多くの詞を文部省唱歌として音楽教科書に掲載。また数多くの軍歌を作詞したことでも知られている。

作曲者：多　梅稚（おおの　うめわか）（一八六九～一九二〇）
多家は、古くから京都で雅楽演奏を専業とした家系。梅稚は東京音楽学校に学び、その後大阪師範学校（現・大阪教育大学）教諭、東京音楽学校助教授・教授を歴任した。

発行者：市田元蔵（一八七五～一九一八）
大阪の出版社「市田昇文館」を経営。鉄道唱歌は市田が企画したが、第一集東海道編の発刊後、昇文館は倒産寸前となり、版権を三木佐助に売り渡した。その後、鉄道唱歌の作詞者大和田建樹の配慮によって、いくつかの鉄道唱歌の出版元を任された。

発行者：三木佐助（一八五二～一九二五）
大阪の三木家は文政八年（一八二五）創業の漢籍問屋で、出版・貸本・漢籍販売などを行っていた。佐助は四代目。佐助は出版業のほか、明治二十一年（一八八八）には楽器販売店「三木楽器店」を開業、山葉（ヤマハ）ピアノ・オルガンなどの関西での販売権を独占した。現在も、日本最古の楽器店として知られる。

鉄道唱歌を有名にした多（おおの） 梅稚（うめわか） の曲

『鉄道唱歌』には、各集とも曲が二つずつ付いている。最初に発表された第一集では、多 梅稚と、同じ京都の雅楽家の出身で多の東京音楽学校時代の指導者である上（うえ） 眞行（まさみち）（一八五一〜一九三七）の曲が掲載された（多 は市田が、上 は大和田がそれぞれ依頼したとされる）。

二人が作った曲は、曲調が全く異なり、ゆったりとした抒情的な上の曲に対し、多が作った曲は非常にリズミカルであった。いずれか好きな方で歌ってもらおうという意図であったが、あまりにもテンポがよく覚えやすい多の曲が広く歌われるようになり、上の曲は殆ど歌われなかったという。

他の各集では、多のほか、第二集で上が、第三・六集では「きんたろう」を作曲した田村虎蔵（一八七三〜一九四三）が、第四集では「桃太郎」を作曲した納所（のうしょ）弁次郎（一八六五〜一九三六）が作った曲も掲載されたが、歌われたのは専ら多の曲であったという。それほど多の曲は、従来の日本はない軽快な曲調であり、走る列車のイメージにぴったりの名曲であった。

『山陽線唱歌 汽車』

（長船友則氏収集資料二〇〇四〇七-二三六八）

明治四十二年十月二十五日発行
作歌：大和田建樹
作曲：田村虎蔵
発行兼印刷：市田元蔵

『鉄道唱歌』全六集の発刊後、これに倣って、各地の鉄道を歌った唱歌が発表されていった。作詞者の大和田建樹は、『鉄道唱歌』を作詞して以降もいくつかの鉄道唱歌を作成しており、これもその一つ。大和田はほかに、郷里である愛媛県の『伊予鉄道唱歌』や、『東海道唱歌』、『九州線唱歌』、『大阪市街電車唱歌』なども作成した。これらの唱歌の作曲は全て田村虎蔵が行ったが、実際には多梅稚の曲で広く歌われたとされている。

広島県立文書館「収蔵文書の紹介」展

収蔵資料にみる
昔の旅の和歌・唱歌

（担当：西向宏介）

期　間：平成 26 年 10 月 31 日（金）
　　〜平成 27 年 1 月 10 日（土）

場　所：広島県立文書館展示室
　　〒730-0052　広島市中区千田町 3-7-47
　　広島県情報プラザ 2 階